

平成4年度

上原記念生命科学財団

一年のあゆみ



## Stanford 便り

Department of Genetics, Stanford University,  
School of Medicine 渡辺賢治  
(東海大学医学部免疫学教室)

ここ Stanford 大学に留学してから1年余りになります。場所は San Francisco から南に下ること車で約1時間の所に位置します。西海岸にあるということで日本との関係は政治的には遠いのですが、文化的、経済的には密接な関係にあります。とくに San Jose を中心とした Silicone Valley には日本のハイテク産業も集まっており、地方紙ではよく日本のことを取り上げます。

そういう土地柄だからなのでしょうが、こちらに来てまず驚いたことが二つあります。一つは、日本車が非常に多いことです。Detroit はどうかわかりませんが、ここ California においては日本車の評価は高くアメリカ人でもアメリカ車は信用していないのが現実です。二つ目はほとんどの人が箸を上手に使うということです。そしてアメリカ人は生魚を食べられないというのは一昔前のことで、ほとんどの人が寿司が大好きだということです。ラボの仲間と寿司を食べに行くことがあります。皆英語の名前ではなく「うに」とか「はまち」とか日本語の呼び方で注文します。裏を返せばそれだけ日本食のレストランやスーパーマーケットがたくさんあるということで、私たち日本人留学生にとってこれほど都合のよいことはありません。

大学内にも日本人留学生が200人ほどいて何かと相談することもできます。Medical Center にも日本人留学生が多く、私の所属する Beckman Center 内に

も、日本人は10人ほどいます。約半分が生化学の人で半分が免疫関係の人です。Stanford に留学することの一番のメリットはいい仲間ができること、いいセミナー、講義が聞けることだと思います。ここでは免疫関係の大学院生対象の講義もあり、錚々たる研究者達の生の講義を聞くことができます。

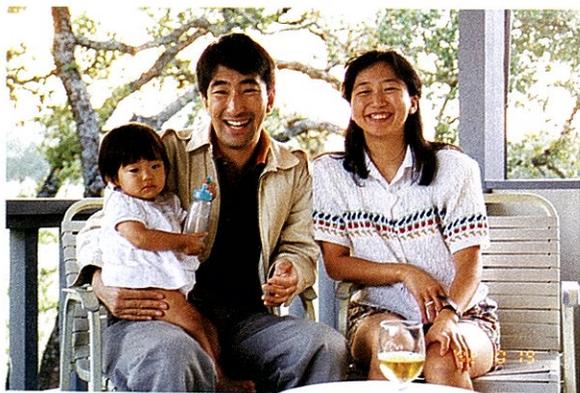
私の所属する研究室の Herzenberg 教授は、cell sorter の開発者として有名な研究者で、研究室には cell sorter の機械が並んでいます。とくに1台の機械は常にハードウェア、ソフトウェアともに多くの技師が手を入れて改良しており、現在の機械はアルゴン、ダイの2レーザー、4カラー staining がルーティンですが、もうすぐ6カラーがルーティンの機械が完成する予定です。しかも一度に100検体以上実験するので1回実験するとデータ解析に3日も4日もかかってしまいます。これで6カラーがルーティンになったらデータ解析はどうなるのかと恐れています。

この研究室で学んだことは限りありませんが、まず由緒あるラボらしく非常に organize されているということです。プロトコールは誰が見てもわかるように整理され、すべてコンピューターに入っています。FACS のデータも10年前のものであろうとコンピューターを通じてすぐに出てきます。次に驚いたことは大学院生ははじめ皆よく勉強するということです。その知識の幅は有機化学から生物学全般に亘るまで広く、セミナーなどでわからない箇所があっても誰に聞いても大体適切な返事が返ってきます。一つにはアメリカでは医学部に入るにも4年制の大学を卒業してからなのでいろいろな分野の人間が集まっているからかもしれません。

ラボの中では研究は盛んですが、かといって、多くの日本人研究者のように、家族を犠牲にするということがないのも印象的でした。私の家内も Stanford 大学の皮膚科で勉強する機会に恵まれ、夫も子育てに参加するのがあたり前という社会の中で、子供の保育園の送り迎え等、夫婦2人で分担してやっております。

とりとめもないことをいろいろと書きましたが、Stanford 大学での生活環境とラボの様子につきこれから留学を予定されている方の参考にしていただければ幸いです。

最後になりましたが、貴重な留学の機会を与えてくださいました上原記念生命科学財団に心から感謝するとともに、貴財団のますますのご発展をお祈り申し上げます。(5.6.17受領)



家族とともに